

北陸地区計算機センター設置をめざして

岡 田 勇

「三日見ぬ間の桜かな」。ことしの桜も早や散ってしまい、浮かれた気分も、ほんの東の間のものでしかなかったことに、淡い感傷にひたり、時の流れの無情さに或るときは、うらめしく思うこともある。金沢大学に電子計算機（NEAC-2230）が導入されてから、早や10年以上経過し、現在はそれよりも数10倍の威力を発揮するFACOM 230-35と変わり、さらに、北陸地区計算機センターとして、大型機の設置を目指して鋭意努力しているわけですが、その変貌と進展の速さに驚くばかりです。私は、この4月1日に工学部にご厄介になることになりましたが、どうぞよろしくご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。ついては、理学部事務長として勤務中の2月下旬の或る日、青野教授がみえられて、計算機センター運営委員会の意向としては、理学部分室のNEAC-2230機を理学部所属の専用機器に管理換をしてもよろしいということなので、然るべくご考慮を願うとのことでした。そこで、学部長とも相談して予算委員会に諮ったところ、これを受け入れすることになりました。斯くて、かつて華々しくデヴィューして、金沢大学唯一の計算機であったNEAC-2230は、時の流れには抗し難く、余命いくばくもない姿となり、学生の教育実験実習用として最後のご奉公をすることに相成った次第であります。考えてみれば、轉た感無量といった気持になります。しかし何時までもそんな感傷に浸ってばかりいられないのです。科学の進歩発展は、より人類の幸福の向上を目指して、大いなる飛躍を期待されている今日の状況において、電子計算機の役割はますます大きくなってきていることは、ご承知のとおりであります。中型から大型へ、この要求はまことに至極當然のことで、何等異論の介入する余地はないと思うのであります。その必要性は充分認識されているのですが、さて実現となると、そう簡単な訳には参りません。殊に、今回のような、北陸地区計算機センター設置という目的に対しては、ブロック的共同利用の性格がある以上、単に金沢大学の一大学だけでは到底全部の行為というか、負担というか、処理はできないのであって、すくなくとも、富山大学、福井大学をあわせた国立三大学が支柱となって、概算要求の重点事項として採り上げていただき、北陸三県に存在する各大学、短大、高等専門学校の力強い支援と運動を基盤に、強力に推進することが何よりも必要とするわけです。既に、昭和46年9月から、北陸地区に大型計算機センター設立の運動は始まっており、文部省に対しての新規概算要求事項としても2年目になるわけですが、感触ではあります、機は熟してきており、その実現の可能性は充分で今後の努力が大切であると思えます。

何卒、関係方面各位の更に厚いご支援を心からお願い申し上げます。今年も昨年に引き続いて概算要求の重点事項として採り上げることに決定し、現在その作業を精力的に進めています。特に大学当局、文部省のご理解ある措置されんことを願って止みません。桜から深緑の季に移り、目にさわやかな青葉がしみこんできて、なにか躍り上がるような気持になります。幼年から青年へと伸びるように、計算機センターも大型機センターとして強化拡充されることを期待し、祈っている次第です。

（金沢大学工学部事務長）